

## T. S. エリオットの「東洋哲学ノート」と姉崎正治

古賀, 元章  
福岡教育大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2557111>

---

出版情報 : *Comparatio*. 23, pp.16-26, 2019-12-28. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## T. S. エリオットの「東洋哲学ノート」と姉崎正治

古賀元章

はじめに

日本ハーバード・クラブ（ハーバード大学を卒業した日本人の団体）は、1911年に外務大臣の小村寿太郎（1855－1911）が同クラブの名義で寄付したことに由来する。同クラブの設立や運営に貢献したのが、ハーバード大学出身で貴族院議員の吉川董吉（1860－1915）である。吉川、ハーバード大学長のチャールズ・ウィリアム・エリオット（Charles William Eliot, 1834－1926）、宗教学者でハーバード大学教授のジェイムズ・ホートン・ウッズ（James Houghton Woods, 1864－1935）の尽力により、日本ハーバード・クラブは総額2万ドルの基金で1913年3月に発足する。

ハーバード・クラブの基金が活用されて、ハーバード大学で「日本の文学と生活」（“Japanese Literature and Life”）という講座が新しく設けられる。この講座の目的は、「アメリカにおける日本への学問的関心を促進すること」<sup>1</sup>である。この目的に合致した人物を検討した結果、日本ハーバード・クラブは有能な宗教学者の姉崎正治を選んでいる。<sup>2</sup>

1913－14年の講義（初年度）では、主題が「日本人の宗教的・道徳的発達」（“Religious and Moral Development of the Japanese”）であり、特殊講義が「日本における仏教各派の宗教的・哲学的思想」（“Schools of Religious and Philosophical Thought in Japan”）である。1914－15年の講義（次年度）では、前年度の「日本人の宗教的・道徳的発達」に加えて、前期に「仏教倫理と日本の生活」（“Buddhist Ethics and Japanese Life”）、後期に「日本における宗教と詩」（“Religion and Literature in Japan”）が開講される。

ハーバード大学大学院生の T. S. エリオット（Thomas Stearns Eliot, 1888－1965）は、姉崎の特殊講義の「日本における仏教各派の宗教的・哲学的思想」に出席する。エリオットが書き留めた筆記録は「東洋哲学ノート」（“Notes on Eastern Philosophy”）としてハーバード大学ホートン図書館に所蔵されている。

エリオットは姉崎の講義の内容からどのような影響を受けたのであろうか。また、姉崎自身は自分が研究している内容からどのような影響を受けたのであろうか。本稿の目的はこれらの点を論じることである。なぜなら、「東洋哲学ノート」に留意して、両者についての研究が今まで十分でないからである。

### 1. 姉崎の「東洋哲学ノート」の特徴

「東洋哲学ノート」に記された1913年10月3日が、姉崎正治の特殊講義の「日本における仏教各派の宗教的・哲学的思想」の初日である。この日の書き出しは、「ナーガールジュナが所持した[サンスクリット語の]本はどんなパーリ語の經典とも違った」（“The version whi

[ch] Nagarjuna had was different from any present Pali text.”<sup>3)</sup> という文である。この文で言及されている本は、大乘仏教中観派の祖のナーガールジュナ (Nāgārjuna, 150–250頃) が著した代表作の『中論』 (*Madhyamaka-sāstra*) を指している。同書第1章の帰敬偈の内容が、次のように記述されている。

〔何ものも〕滅することなく(不滅)、〔何ものも〕生じることなく(不生)、〔何ものも〕断滅ではなく(不断)、〔何ものも〕常住ではなく(不常)、〔何ものも〕同一であることなく(不一義)、〔何ものも〕異なっていることなく(不異義)、〔何ものも〕来ることなく(不来)、〔何ものも〕去ることのない(不去) [ような]、〔また〕戲論(想定された議論)が寂滅しており、吉祥である(めでたい)、そのような縁起を説示された、正しく覚ったもの(ブツダ)に、もろもろの説法者の中で最もすぐれた人として、わたしは敬礼する。<sup>4)</sup>

「滅することなく」から「去ることのない」までが八つの否定辞となっているので、帰敬偈は八不の偈と言われている。肯定は肯定、否定は否定という通常の考え(戲論)が打ち消されている。そのことは、姉崎の1914年3月16日の「東洋哲学ノート」では、「空虚な話が切り倒される / 八重の否定の鋭い剣によって」 (“The vain talkings are cut down / By the sharp sword of the eightfold negation”<sup>5)</sup>) と書かれている。「空虚な話」が『中論』第1章の帰敬偈の戲論に相当するし、「八重の否定」が同じ帰敬偈の八つの否定辞に相当する。

ナーガールジュナは『中論』第1章の帰敬偈で、三つの真理(縁起、空、中道)を悟った仏教の開祖のブツダへ帰依することを表明している。それは、一切のものの空が縁起によって実在となり、縁起も本来、空であるという仏教思想に基づいている。

ナーガールジュナはこの著書25章の中で、次のように述べている。

輪廻(生死の世界)には、ニルヴァーナと、どのような区別も存在しない。ニルヴァーナには、輪廻と、どのような区別も存在しない。(19 偈)<sup>6)</sup>

およそ、ニルヴァーナの究極であるものは、[そのまま] 輪廻の究極でもある。両者には、どのようなきわめて微細な隙間も、存在しない。(20 偈)<sup>7)</sup>

輪廻は仏教信者にとって、衆生が生死を繰り返して迷いの世界を彷徨することである。その好例が現実の人間の姿である。ニルヴァーナ(nirvāṇa)は、涅槃のことであり、衆生が一切の煩惱に打ち勝って心の平安に達する境地である。その境地は、仏教信者が渴望する理想である。輪廻と涅槃は一般に対立した概念である。ナーガールジュナは、これら二つの概念が同じであると主張する。彼が敬愛するブツダは、現実をありのままに観察して世の中の真理(縁起、空、中道)を達観した。ナーガールジュナは『中論』で、現実を凝視したブツ

ダの思想を徹底させて、輪廻即涅槃という見解を提唱する。それは、現実が物事の事実認識の出発点であるということの意味する。1913年10月3日の姉崎の脳裏にあったのは、こうしたナーガールジュナの考えであったと思われる。

ブッダが入滅して100年ほど後、教団の規則などについての解釈をめぐり意見が対立する。その結果、教団は保守的な上座部と進歩的な大衆部だいしゅうぶに分裂する。伝統を重視する上座部は、大衆部が新たな經典も仏説と認める大乘仏教を非仏説の教えとして見なす。大衆部は、上座部が陥った独善性を批判し、ブッダの精神に戻ることをスローガンとする。このスローガンのもと、ナーガールジュナは上述したブッダの三つの真理に改めて注目し、(縁起) 觀を土台とする自由自在な仏教思想を抱くのである。そうした仏教思想が、エリオットの「東洋哲学ノート」で見られた「ナーガールジュナが所持した〔サンスクリット語の〕本はどんなパーリ語の經典とも違っていた」という表現に反映されているであろう。

パーリ語 (スリランカ [旧セイロン]、ミャンマー [旧ビルマ]、カンボジア、ラオスなどの南方上座部仏教で使用されていた言語) について、姉崎は1912年の「倫理と道徳 (仏教)」 (“Ethics and Morality (Buddhist)”) の中で、正統派の上座部の仏教徒たちが經典の文字に縛られ、ひどく細かいことにこだわる傾向を指摘している。<sup>8</sup> このような姉崎の考えが、先の「どんなパーリ語の經典」という言葉に取り入れられているであろう。

このようにブッダの死後の仏教集団の歴史を考えると、10月3日のエリオットの筆記録の書き出しの文が示唆するのは、ナーガールジュナが上座部の形式主義を脱し、ブッダの本来の悟り (前述した三つの真理) に帰依して、万人が成仏できる可能性を唱えることである。ナーガールジュナの仏教信仰の姿勢に関する姉崎の同日の話が、「原始仏教は新しい小乗仏教でなかったと、われわれは結論づける。大乘仏教の最も重要な言い回しはブッダの言葉に由来する」 (“The Primitive Buddhism was not, we conclude, new Hinayana. The most important phrase of Mahayana are derived from the Buddha’s words.”<sup>9</sup>) というエリオットの記述に示唆されているように思われる。

10月3日の特殊講義で姉崎は、ナーガールジュナの仏教思想を紹介した。ブッダの寂滅後、開祖についての存在觀が問われることとなる。11月7日のエリオットの筆記録で、「われわれはブッダという人物をわれわれの指導者としてどのように持ち続けることができるのだろうか？ ブッダは歴史的な人物であるが、彼を宇宙やわれわれの心と究極的に一体とするのを放棄できるのであるだろうか？ これら二つの利害関係をどのように調和させたいのだろうか？ これが中国天台宗の問題であった (天台は日本語)」 (“How can we keep the person of Buddha as our leader? The person, the historical master; and yet not abandon his ultimate identity with the cosmos and with our mind? How reconcile these two interests? This was the problem of the Tian-tadhi School Tendai (Japanese)”<sup>10</sup>) 同日のエリオットの「東洋哲学ノート」では、この問題についての中国天台宗の見解が次のように示されている。

Tiantai has its role basis in Saddharm pundarika [*Saddharma-puṇḍarīka-sūtra*]; but its philosophy is an attempt to consummate the distinctions of various schools as to the conception of reality. Tiantai's contribution was a synthesis to embrace all views by elevating them ([aufheben] Hegel) to his own standpoint.<sup>11</sup>

天台宗は『法華經』を基にしている。しかしその哲学は、実在の概念についての様々な宗派の区別をまとめる試みである。天台宗の貢献は、すべての見解を自らの観点にまで高めること（ヘーゲルの「揚棄」）によって、その見解を統合することである。

中国天台宗は、時代の経過と共に、歴史的な人物としてのブッダの姿に限定せず、衆生の心と一体であり宇宙でもあるブッダの象徴的な姿を探究している。このような考えに立って、姉崎は中国天台宗がこれら二重のブッダの姿をどのように調和させるかを語っている。そこで、中国天台宗の教学が言及される。この宗派の根本經典は『法華經』である。この經典の前半は、声聞乘、縁覚乘（独覚乘）、菩薩乘という三乗が、一乗の方便であることを説いている。この經典の後半は、時空を超えた久遠の本仏が、一乗という絶対的な真理のもと、衆生を教化することを述べている。この經典の後半は、歴史上のブッダがこの本仏の仮の姿であることを記している。<sup>12</sup>

中国天台宗は、上述した『法華經』にブッダの存在観についての答えを見出している。この宗派の高祖である智顛（538-97）は、諸仏教を整理した五時八教を主張し、仏教思想を再組織した蔵・通・別・円の四教と空・仮・中の三観を基に、一心三觀、十如是、十界互具、一念三千、十乘觀法、性具説などを説いている。姉崎は、ドイツの哲学者のゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831）の「揚棄」（“aufheben”）（古いものの内容が新しい要素のために保持される）を取り上げて、智顛の主張の内容が統合を推し進める中国天台宗の教学として言及したのである。

日本で『法華經』を重視するのが日蓮宗の開祖の日蓮（1222-82）である。1914年12月19日、姉崎は「仏国土」を意味する“Buddhaksetra”（サンスクリット語の Buddha-kṣetra）に触れ、この「仏国土」を日本で実現しようとした人物として日蓮が取り上げられる。<sup>13</sup> 同年4月27日、姉崎は受講者たちに、日蓮の「生死一大事血脈鈔（1372年）」（“The Heritage of the Sole Great Thing of Life and Death. (written in 1372)”）という見出しのレジュメを配布する。そこには次のような英文が見られる。

Should the Bodhisattva Visistacarita [Viśiṣṭa-cāritra] appear in these days of the Latter Law for propagating this gateway of truth, or should he not appear? The Scripture tell[s] us that he should appear,—yet would it be so? Would the Bodhisattva appear or not? In any way, I Nic[h]iren, have now done the pioneer work. Whatever might happen to you, arouse a strong faith and pray in sincerity

that you could, at the moment of death, utter the Sacred Title in clear consciousness and in earnest belief. Do not seek beside this any heritage of the sole great thing of life and death. Herein lies the truth of the saying that there is Bodhi even in depravities and Nirvana [Nirvāṇa] even in life and death.<sup>14</sup>

この見出しは、日蓮が弟子の最蓮房（生没年不詳）に対して書いたものである。1916年、姉崎の『法華經の行者日蓮』が刊行される。上の英文の和文が、1916年の著書で次のように書かれている。

上行菩薩、末法、今の時、此の法門を弘めんが為に御出現之あるべき由、經文には見え候へども如何候やらん。上行菩薩出現するとやせん、出現せずとやせん。日蓮先づ粗弘め候なり。相溝へ相溝へて強盛の大信力を致して、南無妙法蓮華經、臨終正念と折念し給へ。生死一大事の血脈此より外に全く求むることなかれ。煩惱即菩提、生死即涅槃とは是れ也。<sup>15</sup>

“there is Bodhi even in depravities, and Nirvana [Nirvāṇa] even in life and death.”（「煩惱即菩薩、生死即涅槃」）という文に注目してみよう。姉崎は『法華經の行者日蓮』の中で、この文について次のように説明している。

要するに、肉身の誕生からその死に至るまで、一期の生死も、宇宙の生々の一部として之を觀じ、その理を身に体すれば、その中に永遠なる生死の脈搏がうつ、しからば、生死の間に発動する欲求煩惱も、久遠の生命を体現する努力として觀れば、その中に成仏道すなわち涅槃の理想が現はれてくる。

「<sup>そ</sup>即」といふことを、「直にそれが」という意味でなく、「その本性を基本としてその性相を轉換すれば」という義に見れば、煩惱の中に菩提ありということで、煩惱即菩薩、また生死即涅槃となる。<sup>16</sup>

特殊講義の初日の1913年10月3日、ナーガールジュナの『中論』が言及されていた。ナーガールジュナはこの著書の中で、輪廻即涅槃という考えのもと、三つの真理（〈縁起〉、〈空〉、〈中道〉）を悟ったブツダを敬愛した。ナーガールジュナの考えは現実重視を示唆していた。これらの論考から判断して、日蓮の「煩惱即菩提、生死即涅槃」は、論師の現実重視を受け継いでいるであろう。

『法華經の行者日蓮』からの引用文は、『法華經』の從地涌出の上行菩薩が久遠長寿の如来であるブツダを護るため地面から湧き出ることを説いている。それは、『法華經』の行者の日蓮が上行菩薩と一体となる決意を暗示している。姉崎が『法華經の行者日蓮』の「序言」で日蓮の全体像を『法華經の行者』という名で尽くしている<sup>17</sup>と述べるように、この日蓮

の全体像を背景として、上人の現実重視による揺るぎない決意が同書からの引用文に反映されていると言える。

姉崎は、『法華経』の行者の日蓮が「仏国土」を日本に実現しようとした重要人物であることを講義したと思われる。1915年に帰国して3年後、姉崎は「法華経行者と云ふ意義」(1918)の中で、日蓮について書いている。それは、要約すると、①『法華経』の理論・教理を実行すること、②末法悪世の中で、理想に向かって奮進すること、③一乗主義を発揮して、滅罪と成仏を衆生と共にすること、である。<sup>18</sup> この経典の主たる特色は、統一的真理としての一乗妙法、久遠の人格的生命としてのブツダ、現実の人間の活動としての菩薩行動、である。<sup>19</sup> 中国天台宗は、一乗妙法に基づき、久遠のブツダを説いていた。日蓮は、このような中国天台宗の教学を智顛から学び、<sup>20</sup> 『法華経』を重要視する。その結果、日蓮は現実を肯定した『法華経』の行者となる。姉崎は特殊講義で、そうした日蓮仏教を念頭に入れて、上人を紹介したと思われる。その一端が「法華経行者と云ふ意義」の要約からうかがわれよう。

1914年6月、姉崎は休暇のためアメリカから一時帰国する。同年7月3日、彼の一時帰国と有力な実業家、慈善家の渋沢栄一(1840-1931)の中国からの帰国を歓迎して、帰一協会<sup>21</sup>の例会が東京の上野精養軒で開かれる。この例会で姉崎は、アメリカのハーバードでの特殊講義について、「其[講義]の中心とする所は仏身論<sup>22</sup>でありまして、順を追うて仏教の発展を明にし、勿論日蓮上人の教義に帰着しました<sup>23</sup>と語っている。日蓮信仰者であった姉崎<sup>24</sup>の特殊講義が日蓮仏教に行き着いたことは軽視すべきではない。日蓮が帰依する『法華経』に留意して、姉崎はブツダから上人までの仏教の歴史的流れを組み立てたのである。それが姉崎の「東洋哲学ノート」の特徴であると言える。

## 2. エリオットへの「東洋哲学ノート」の内容の影響

イギリスの詩人のエドウィン・アーノルド卿(Sir Edwin Arnold, 1832-1904)がブツダの生涯を著した『アジアの光』(*The Light of Asia*, 1879)を少年の頃に読んで感動したことを、1944年にエリオットは述懐している。<sup>25</sup> 少年時代の仏教への興味が幾分か引き金となって、エリオットは姉崎の特殊講義に出席し、「東洋哲学ノート」を書き留めたと思われる。

エリオットが姉崎の特殊講義の「日本における仏教各派の宗教的・哲学的思想」からどのように影響を受けたと考えられるのであろうか。その点を検討するため、1910-11年のパリ遊学から1914年の海外留学までのエリオットに焦点を当てたい。

エリオットによれば、パリ遊学の動機は本物の詩を学ぶためであり、<sup>26</sup> ハーバード大学で1909-10年に批評家のアーヴィング・バビット(Irving Babbitt, 1865-1933)のフランス文芸批評の講義に出席するためでもあった。<sup>27</sup>

当初、エリオットの両親—父親のヘンリー・ウェア・エリオット(Henry Ware Eliot, Sr., 1843-1919)と母親のシャーロット・シャンプ・エリオット(Charlotte Champe Eliot, 1843-1929)—は息子のパリ行きに反対する。両親の反対は、エリオット家を墓場から支配して

いた息子の祖父で高名な牧師ウィリアム・グリーンリーフ・エリオット (William Greenleaf Eliot, 1811-87) の遺訓とでもいうべきものと深く関係している。その遺訓とは、生前の祖父が全身全霊で行ったこと (公共への義務、慈善、立派な仕事) である。<sup>28</sup> エリオットは家庭で両親から、祖父の教えに反する行為が罪であるという躰を受けたり、<sup>29</sup> すべきこととすべきでないことを教えられたりしている。<sup>30</sup> 今回の息子のパリ遊学は、両親にとって、祖父の遺訓に基づく家庭教育から逸脱していると判断されたのである。

結果として、エリオットは両親を説得してパリへ旅立つ。両親から全面的に認められた行動ではないため、異国への学問の期待と両親への背信行為との板挟みに陥って苦悩するエリオットの姿が想像される。その姿を考察するため、パリ遊学中に脱稿された二つの詩の内容に着目してみたい。

「風の夜の狂想曲」(“Rhapsody on a Windy Knight,” 1911) は、真夜中に 1 人の男が月光に照らされた場末の街路をとぼとぼ歩いて、午前 4 時に帰宅する際の体験を描いている。午前 1 時半、ドアの戸口に立つ娼婦は男を誘惑しようとする。午前 2 時半、男は、溝にへばりついて、腐った一片のバターを貪り食う猫と出会う。午前 3 時半、男の心の中で、月が女性として擬人化される。擬人化された彼女の手が、埃とオーデコロンの匂いのする紙のバラをひねる。このポーズは無反応な相手の態度に苛立つ彼女を連想させる。このような描写はわれわれに、何もしてやれなかった後ろめたさを改めて思い返す彼の心境を感じさせる。午前 4 時、男は様々な体験をした後に自分の住まいに帰りつく。街灯は部屋に戻った彼に、「靴を戸口に置いて、眠れ、明日に備えよ」(“Put your shoes at the door, sleep, prepare for life.” l. 77<sup>31</sup>) と語る。この語りは男の内面の動きを表わして彼の独白の役割を果たしているし、彼が目覚まして空しい日常生活を再び始めることをわれわれに想像させる。「J・アルフレッド・ブルーロックの恋歌」(“The Love Song of J. Alfred Prufrock,” 1910-11) の冒頭では、ブルーロックは「それじゃ行ってみよう、君と僕とで」(“Let us go then, you and I,” l. 1) と語って、「君」と一緒に出かける。その場所は、イタリアの著名な彫刻家、画家、詩人のミケランジェロ (Michelangelo, 1475-1564) を話題にしている社交界の女性たちの部屋である。ブルーロックは彼女たちに近づいて話しかける時間があるかどうかを考え込み、自分の身体 (禿げた頭、細くなった手足) を彼女たちに嘲笑されるのではないかと悩む始末である。結局、この詩が終わるのは、「僕たちは海の部屋にいた / ... / 人間の声は僕たちを目覚めさせるまで。そして僕たちは溺れる」(“We have lingered in the chambers of the sea / ... / Till human voices wake us, and we drown.” ll. 129, 131) という詩行である。「海の部屋」から連想されるのは、静かな海底のイメージである。このイメージは、社交界の女性が談話する賑やかな部屋と対照的である。このような対照から考えられるのは、彼が社交界の女性たちを完全に忘れたわけではないということである。「僕たち」は、ブルーロックと同伴者 (冒頭の君) を指す。「僕たちは溺れる」という溺死のイメージは、現実世界にいる社交界の女性たちを思い浮かべて、彼女たちの部屋に出かけたい衝動に駆られるであろう。

エリオットの証言によれば、彼は哲学の教授になるつもりで 1911 年 9 月に帰国し、同年



秋に母校のハーバード大学大学院博士課程に進学する。<sup>32</sup> エリオットの進学は、パリ遊学に対する両親の当初の反対に完全に逆らえず、アメリカへ戻ることを意味するので、「J・アルフレッド・プルーロックの恋歌」の最終行の溺死の場面に盛り込まれているであろう。エリオットはパリで暮らしてフランス語でものを書きたい気持ちを抱いている。<sup>33</sup> そうした気持ちから察して、両親からの自立心と両親への背信行為とのジレンマに悩むエリオットの苦悩の姿が、「J・アルフレッド・プルーロックの恋歌」や「風の夜の狂想曲」の語り手たちの優柔不断な態度の執筆に反映されているであろう。

最初の日の特殊講義で姉崎は両親に従順な哲学の道を選択したエリオットに、大乘仏教の代表的なナーガールジュナの仏教思想を紹介して、この論師が依拠するブッダの根本思想に触れる。それは、ブッダが悟った四諦しつたいを示す教説のための前段となる。エリオットはこの教説を次のように書き記している。

The ariya saccani [パーリ語の cattāri ariya-saccāni] (nirodha etc). Corresponds to diagnosis in medical treatment. Life is pain: a matter of fact, not necessarily pessimistic.... When pain and life are understood, according to Mahayana, then what we have thought of as pain is no longer pain. (Eliot's underline) <sup>34</sup>

四諦よつしつ（滅めつ [滅諦] 等）。医療の診断に対応する。人生は苦である。これは、事実であるが、必ずしも悲観的ではない。……大乘仏教によれば、苦と人生が理解されると、その時われわれが苦と考えたものはもはや苦とならない。（下線 エリオット）

ブッダは北インドの鹿野苑で、初めて5人の比丘に法を説いた。この時の法が、悟りを得る道筋を説明するための真理である四諦しつたい（四聖諦とも呼ばれる）と言われている。四諦は、苦諦くしつ、集諦しつ、滅諦めつ、道諦どうしつという4つの真理から成る。苦諦は現世の一切が苦という真理であり、集諦は苦の原因が愛執という真理である。滅諦は苦の止滅についての真理であり、道諦はこの止滅の方法についての真理である。四諦観は古代インドの医療にたとえられる。すなわち、苦は肉体の病状であり、集は病因である。滅は病気の回復であり、道は病気の治療である。四諦を理解すると、大乘仏教では人間は人生や苦を悲観的としてではなく、前向きにとらえることができるのである。そのことが、上の引用文から読み取れるであろう。

エリオットがアンダーラインを引いて注目しているのは「人生は苦である」という文である。それは、エリオット自らの苦悩がパリから帰国後も続いていることを示唆するであろう。

1914年4月13、17、27日、5月1、8日、日蓮の行動が特殊講義を行う姉崎の口から語られる。1913-14年を通して、姉崎は「日本人の宗教的・道徳的発達」を講義するが、1930年に出版された彼の『日本宗教史』(*History of Japanese Religion*)はこの講義用の原稿に基づいて書かれている。<sup>35</sup> 1930年の姉崎の著書では、日蓮の小伝や基本的な仏教思想が述べられている。この著書に記された日蓮の小伝<sup>36</sup>を参考にして、姉崎の口述からうかがわれ

る上人の姿の一端を論述したい。

30歳の頃、日蓮は真の仏教が『法華経』であり、他の宗派は不正で墮落していると確信するようになる。上人は、この確信を背景として『立正安国論』（1260）を鎌倉幕府に提出したが、かえって人々から襲撃されたり、草庵を焼かれたりした。それでも、いわゆる辻説法を止めなかったため、上人は伊豆半島の荒れ果てた海岸へ追放される。この地で、『法華経』を主上とする彼の宗教体系が打ち立てられる。その後、流罪となった上人は、自分の信念をもっと立証しようとして、『立正安国論』の趣旨を再び幕府に提出したり、高僧と公開討論を求めたりする。しかし幕府は、日蓮を国家に対する反逆者として佐渡へ流罪とする。当地で、『開目妙』（1272）や『観心本尊抄』（1273）が書かれ、上人の宗教体系が発展される。これらの著書では、人類を救済しようとする彼の強い使命が表明される。後に佐渡から解放されて身延山（現在の静岡県東部）に在住した時、彼はその使命を実現させるため、幕府の条件（幕府の非難をしなければ、布教を認める）を退ける。

上述の日蓮の姿から浮かび上がるのは、人類を救済しようとする上人の強い意志であると思われる。このような上人の強い意志を検討するために参考となるのが、「鎌倉時代の仏教と現代思想（上）」（1916）における姉崎の次のような文章である。

日蓮上人の時代は、王政瓦解の後、武門政治の世であり、且つアジア大陸の動揺が此の島帝国に押し寄せて来た時代、一国が荒海に漂ふ小舟の感ある時代であつた。上人が法華経主義の為に鎌倉幕府と衝突し、その事業が元寇の国難と結びつき、強烈な国民的色彩を帯びたのは必然の勢であつて、……聖徳伝教の遺志理想が、上人に於ては強烈な戦闘主義の折伏となつて現れたのは、一は上人の性格にも因るが、一は又、時勢が促し又要求した意志力の発見であつた。<sup>37</sup>

日蓮が生きた時代は、天皇や公家による王朝国家体制に代り、武家政権による鎌倉幕府の世である。当時、蒙古は宋の討伐を考え、宋と日本の関係を絶ち、その日本を取り込むことを企てる。1268年、蒙古からの最初の国書は、太宰少貳の武藤資能（1160-1228）に手渡される。武藤は国書を鎌倉幕府に送り、幕府はその国書を外交権のある朝廷に送る。朝廷は、会議の結果、蒙古への返書をしないことを決める。蒙古の日本招諭がその後何回も行われたので、日本は蒙古襲来の危機感が高まり、不安な状態に置かれていた。日蓮は、最高権力者で前執権の北条時頼（1227-1263）に『立正安国論』を奏上し、災難（地震、暴風雨、飢饉、疫病など）の続出が国家の邪法（法然〔1133-1212〕の専修念仏）の採用によるものなので、正法の『法華経』の採用を訴えている。外憂内患を敏感に感じていた日蓮は、『立正安国論』の中で予言した「他国侵逼の難」<sup>38</sup>が、実際に、文永の役（1274）と弘安の役（1281）の2度にわたる日本襲来となって実現する。この著書で「所詮天下泰平国土安穩は君臣の樂う所土民の思う所なり」<sup>39</sup>と述べているように、日蓮は庶民の立場に立って、国家統一の確立を希求している。それは、姉崎が指摘する日蓮の「国民的色彩」を表わすであろう。

姉崎は3人（飛鳥時代の政治家、宗教者の聖徳太子〔754-622〕、日本天台宗の開祖の伝教大師最澄〔766 or 767-822〕、日蓮）を取り上げている。3人の関係を論述して、日蓮の行動を力説する姉崎の上人観を明らかにしたい。日蓮によれば、太子は中国の隋に小野妹子（生没年不詳）を中国の隋に遣わして『法華経』を取り寄せ、<sup>40</sup> この經典と『勝鬘経』『維摩経』を鎮護国家の法と定めている。<sup>41</sup> 日蓮の最澄観は、「日本に仏法わたりて・すでに700余年・但伝教大師・1人計り法華経をよめり」<sup>42</sup> ということであり、『法華経』を初めて日本に弘通した僧として見なしている。<sup>43</sup> 日蓮は『法華経』こそが正法と信じ、この經典の行者として布教する。太子は『法華経』を鎮護国家の確立のために活用する。最澄はこの經典を最初に日本に弘通する。姉崎の見方では、こうした2人の功績（姉崎の言葉では、遺志理想）が日蓮に受け継がれて、上人はこの經典の教えを実行する。そこには、時代の情勢を反映した日蓮の意志力も、こうした2人から受けて継がれているという。

姉崎は、特殊講義で日蓮の小伝をエリオットに伝える時、このような上人の強い意志力を語ったことは想像に難くないであろう。姉崎は、日蓮の強い意志力を主張する際、上人を聖徳太子と伝教大師に連なる『法華経』流布の系譜上に位置づけている。その位置づけから明らかになるのは、日蓮仏教の目標が、聖徳太子の「国家統一」の建設と伝教大師の「国民の精神的統一」の実現の両方を目指したということである。姉崎が日蓮仏教の特徴として発見したことは、この両方を達成するため、時の鎌倉幕府に折伏の態度で立ち向かった強い意志力なのである。

1914年3月末には、エリオットはハーバードからシェルドン在外研究奨学金（Sheldon Traveling Fellowship）による海外留学が決まっている。その目的は、イギリスのオックスフォード大学のマートンカレッジ（Merton College）でF・H・ブラッドリー（F. H. Bradley, 1846-1924）を中心とした哲学研究である。実際には、ドイツのマールブルク（Marburg）大学の夏期講座を受けるつもりで当地に滞在するが、第一次世界大戦（1914-18）が勃発したため、予定を変更してイギリスへ向かっている。

1914年3月末に着目すると、エリオットは姉崎の特殊講義で聞いた「人生は苦である」という仏教の教えに注目していた。それはエリオットに、今後の進むべき道を見出せないでいる現実を打開したい気持ちの参考となったと思われる。そのための打開策としての海外留学は彼にとって、両親の反対と、将来の道を自分で決めたい自立心とに抵触しない行為である。1914年4-5月、エリオットは姉崎の特殊講義から、時の鎌倉幕府に勇敢に立ち向かい、人類救済の実現を使命とする日蓮の強い意志力を学んでいる。それは、両親の庇護から自立するため海外留学を行う励みとなったと思われる。

### 3. 姉崎と「東洋哲学ノート」

姉崎は、1914年に一時帰国して帰一協会例会の歓迎会で、次のような発言をしている。

私の参つたのは学問的研究の意味ばかりであつて、日米間の国際関係をどうするか等の

意味は少しも無かつたのであります。丁度カリフォルニアの排日問題の喧しかつた後でありますから、多少その事に関係でもあるかと想像した人もあつたでありませうが、実は全然無関係でありました。私は彼地に在つた自分の職務を執る上に、自分は純学術的の講義をするのである、日本文明の真相を研究せんとする人にその資料を供給するのであるといふ覚悟を以て之に当つたのであります。<sup>44</sup>

一時帰国の挨拶で、姉崎は日本の宗教研究者として、日本文明を研究したいアメリカ人への学問的な貢献であることを述べている。それは、彼が『法華経』の行者としての日蓮に倣って菩薩行動をし、帰一協会の趣意<sup>45</sup>や前述した日本ハーバード・クラブの目的に合うことを意識したものとなっている。

姉崎は上記の歓迎会の報告で、ハーバードでの講義姿勢が「日米間の国際関係」や「カリフォルニアの排日問題」に無関係であると発言している。この発言自体が、日米関係を強く意識していることの裏返しであると言える。このような裏返しは、ハーバードで講義する別の意図をほのめかす次のような彼の発言から推し量ることができよう。

他の方法に比べますと、学問的研究によつて誤解を取除くといふことは迂遠な事のやうにも見えます。学問上の交通は其の版円も狭く其の結果の現はれることも勿論遅いものでありませう。併しながら是は何よりも一番正確なる理解を与へます。外国人をして日本に対する誤解を去らしめる為には、最も正確にして安全なる道であります。<sup>46</sup>

「誤解」は1913年にカリフォルニア州で成立した排日土地法（1913年にカリフォルニア州で成立）による日米間の摩擦を指し、「外国人」はアメリカ人を指す。1904-05年の日露戦争後、日米両国は満州の統治や海軍の増強についての問題で対立する。そうした対立の影響を受けて、1906年に同州のサンフランシスコで起つた日本人学童隔離の問題（サンフランシスコ市内の学校に通う日本人の学童が、学務局によって東洋人学校に転校させられた事件）が、日本人のアメリカへの移民問題へと拡大する。翌年、日本政府はアメリカ政府と、新規の滞米移民（再渡航者、在米日本人の父母妻子、学生、商人などを除く）を自主的に禁止する「日米紳士協約」を結んで、両国間にある移民問題に決着を図る。しかし、1913年にカリフォルニア州で排日土地法（在留日本人の土地所有の剥奪、彼らの借地権を3年以下に制限）が成立する。翌年6月の歓迎会でアメリカからの帰朝報告をするうち、姉崎は排日土地法による日米の国際摩擦を解消したい感情を吐露したと思われる。

このような感情の背後にある姉崎の不満が、1914年8月の帰朝報告で次のように明らかにされる。

亜米利加の土地で時々起る排日問題は、単なる労働者側の利害問題にのみ起因して居るのではない。他に重大なる原因があるが、自分はそれに就いて多くを言ふを欲しない、

只だ之れ丈の事は茲処で断言して差仕えない、曰く「排日問題の一因は双方の誤解にある、而して誤解を生ぜしめた責任は日本人自らにある」……自分が茲に切に我日本人に望む処は、日東の君子国と独りよがりをするを止て、其君子国なる所以を海外の諸国へ十分に了解しむる様に努力せられんことである。<sup>47</sup>

1908年に「日米紳士協約」が締結されたにもかかわらず、日本人の写真花嫁の入国が続いたり、日本人の農業経営への進出が強まったりする。このような現状はアメリカの労働者の利害問題へとなる。この利害問題による日米関係の悪化をなくすため、姉崎は日本人の行動に自制を求める。それは、日本の国運を高め、日米の関係を好転させるためである。姉崎のハーバードでの特殊講義は、学術の交流ばかりではなく、日米間の政治的な状況も視野に入れたものとなっている。日露戦争（1904-05）の後の彼は、西洋文明のアメリカと東洋文明の日本が手を携えて、「世界の進軍と人道の發揮の上に永遠の意義を有する真の友情」<sup>48</sup>なることを希求し、また、東洋文明の代表者である日本が世界の調和に向けて、「世界文明の指導者茲にあり」と号令すべき<sup>49</sup>と考える。彼の目標は、戦勝国の日本を西洋諸国と同等に見なして、世界協調を推進することである。姉崎がハーバードの特殊講義を日蓮仏教で締めくくるのは出席者に、『法華経』の意義（「煩惱即菩提、生死即涅槃」に基づく現実認識の必要性）を知らせるばかりではなく、日本文明の一端を正しく認識させて日米が連携すべきことも気づかせる意図があったと思われる。

#### おわりに

1913年6月、ハーバード大学大学院に在籍中の T. S. エリオットはイギリスの哲学者の F. H. ブラッドリーの『現象と實在』(*Appearance and Reality*, 1893)を購入している。1913-14年、エリオットはハーバードの哲学者のジョサイア・ロイス (Josiah Royce, 1855-1915) の「諸種の科学的方法の比較研究」(“A Comparative Study of Various Types of Scientific Method”)を受講中に、ブラッドリーの著書を熱心に読んでいる。<sup>50</sup> これらの事実から、エリオットはこの『現象と實在』を勉強していることがわかる。『現象と實在』は、「誠実に真理を探究する懐疑心には、諸問題を終わりまで考え、その終わりが始めに想定されたものに隠されていることを知る」(“An honest and truth-seeking scepticism pushes questions to the end, and knows that the end lies hid in that which is assumed at the beginning.”<sup>51</sup>)と述べている。ブラッドリーの見解は、真理探究の始まりと終わりの同時存在の認識を指摘している。

1912年秋~1913年春、エリオットはイエール大学からの客員教授で哲学者のチャールズ・モンタギュー・ベイクウェル (Charles Montague Bakewell, 1867-1957) が開講する「實在の性質」(“Nature of Reality”)と「カントの哲学」(“Kantian Philosophy”)に出席している。エリオットは、ベイクウェルの授業を受講するため「カントに関する三つの評論」(*Three Essays on Kant*, 1913)を脱稿する際に利用したのがこの哲学者の『アメリカ哲学に

おける原典』(Source Book in American Philosophy, 1907)である。エリオットはこの著書に記載されているギリシャの哲学者のヘラクレイトス(Heraclitus, 544 or 538 – 484 or 475 BC)の「円の状況では始まりと終わりが同時に起こる」(“In the circumstance of a circle beginning and end coincide.”<sup>52</sup>)という断片的文章に注目している。

1914年春、イギリスからの客員教授で哲学者、論理学者のバートランド・ラッセル(Bertrand Russell, 1872–1970)の「論理学」(“Logic”)を受けている。ハーバードでラッセルと談話している時、エリオットはヘラクレイトスへの興味を示している。<sup>53</sup> この興味の一例がヘラクレイトスの断片的文章である。この断片的文章がエリオットの目を引きつけたのは、これからの自分の人生の進路について参考になったと思われる。エリオットは、1910–11年にハーバードを離れてパリ遊学を行う。帰国後の彼は、両親の庇護を受け入れているが、自分自身による人生の進路を完全に断念したわけではなかった。この断片的文章が彼に気づかせたのは、始まりと終わりの同時存在であろう。

始まりと終わりの同時存在は、エリオットが熱心に読んだ先の『現象と実在』からの引用文でも読み取れる。彼にとって考えられるのは、始まり(今回の海外留学)と終わり(両親の庇護の解消)が同時に起こることであろう。そうしたエリオットの考えを後押ししたのは、彼が同じ頃に姉崎正治の特殊講義から学んだと思われること(人類救済の実現を実行しようとする日蓮の強い意志力)と判断できよう。

姉崎正治がハーバードで特殊講義を行う意図は2つあった。1つは、アメリカにおける日本の学問的関心の促進であった。もう1つは、アメリカの排日問題を解決して、日米の連携による世界協調の推進であった。2つのうちの前者が上手くいけば、それが日米の連携につながり、世界協調の糸口になるのである。その意味で、彼の2つの意図は密接な関係にある。

第一次世界大戦の最中に帰国した姉崎は、同大戦についての見解を発表する。彼の「十二時の打つ時」(1917)は、連合国側に国際的な協調精神の機運が見られると考え、「世界的大舞台の夜明けは近きつゝある」<sup>54</sup>と述べる。彼の「世界の新局面に対する覚醒」(1917)は、大戦後に新しい局面を予想して、「人生の根本意義は如何、国家生存最終理想は如何、人類全体の運命、若しくは方針は如何なるべきか、是等の問題に続々逢着するようになって来る、さうして是等の問題に対する解釈は、各人各国多少の特色はあるにしても、其れが深い意味に於ける精神的覚醒であると云ふことだけは明らかなる事実である」<sup>55</sup>と説く。彼の「人本主義の実行」(1918)は、「世界人類は、戦乱の大破壊を経て、新生命に復活せんとしつゝある。大正の日本人が此の曙光を見る能はずして、世界の新生面に後れをとるなら、汝等は国の生命と共に同胞の生命を殺す事になるぞ」<sup>56</sup>と主張する。

1917年の二つの評論は、予言者<sup>57</sup>で『法華経』の行者である日蓮の菩薩行動に倣って、大戦後の日本や各国の精神的絆のあり方を模索している。翌年の評論も、前年の評論と同じような見方を踏襲して、国民統合と世界協調を強調する。このような姉崎の強調は、ハーバードの特殊講義で意図した日米連携の必要性を踏み台にして、国民統合と世界協調の必要性を日本人に強く訴えていることを示唆する。

このようにして、姉崎の特殊講義をエリオットが記録した「東洋哲学ノート」の内容は、2人の思考作用に大きな影響を及ぼしていると言えよう。

#### 注

1. 姉崎正治著・姉崎正治先生生誕百周年記念会編『新版 わが生涯』姉崎正治先生生誕百周年記念会、1974年、85頁。同書への言及は、姉崎著・姉崎生誕百周年記念会編『新版 わが生涯 / 姉崎正治先生の業績』大空社、1993年による。
2. 美術界の指導者の岡倉天心（1863-1913）がハーバード大学で講義することに内定していた。しかし岡倉が病死したため、姉崎は彼の代役であった。坪内隆彦『岡倉天心の思想探求—迷走するアジア主義— 1』勁草出版、1998年、72頁。
3. T. S. Eliot, "Notes on Eastern Philosophy," Unpublished essay. 3 Oct. 1913-15 May 1914, The Houghton Library, Harvard University, Cambridge, p. 1.
4. 三枝充恵『中論』（上）第三文明社、1992年〔初出1984年〕、85頁。
5. T. S. Eliot, "Notes on Eastern Philosophy," p. 60.
6. 三枝充眞『中論』（下）第三文明社、1991年〔初出1984年〕、701頁。
7. 同上、701、703頁。
8. Masaharu Anesaki, "Ethics and Morality (Buddhist)," 1912, *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, vol. 5, ed. James Hasting (NY: Charles Scribner's Sons, 1920), p. 448. この評論はハーバードの特殊講義で配布されている。Cleo McNelly Kearns, *T. S. Eliot and Indic Traditions: A Study in Poetry and Belief* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), p. 77.
9. T. S. Eliot, "Notes on Eastern Philosophy," p. 1.
10. T. S. Eliot, "Notes on Eastern Philosophy," p. 11.
11. T. S. Eliot, "Notes on Eastern Philosophy," p. 16.
12. 『法華経』についての解説は、田村芳朗『法華経—真理・生命・実践—』中央公論社、1971年〔初出1969年〕、70-112頁を参照。
13. T. S. Eliot, "Notes on Eastern Philosophy," p. 33.
14. T. S. Eliot, "Notes on Eastern Philosophy," p. 72.
15. 姉崎正治『法華経の行者日蓮』講談社、1993年〔初出1983年〕、261頁。同書の初版は、1916年に博文館より出版されている。本稿では、講談社の1993年発行の著書より引用する。
16. 同上、262頁。
17. 姉崎前掲『法華経の行者日蓮』「序言」1頁。
18. 姉崎正治「法華経行者といふ意義」『法華』5-1、1918年、22-24頁。
19. 田村前掲『法華経—真理・生命・実践—』70-120頁を参照。

20. 姉崎前掲『法華經の行者日蓮』106-07頁。
21. 1912年6月20日、婦一協会が発足する。姉崎は同協会の発足に関わり、幹事の1人となる。
22. 姉崎によれば、仏身論はブッダの人格に関する考察である。姉崎正治『現身仏と仏身論』有朋館、1904年、5頁。
23. 姉崎正治「渡米中の所感」『法華』1-4、1914年、46頁。
24. 大学時代の同級生で高名な文芸評論家である高山樗牛(1871-1902)の影響によって、姉崎は日蓮への熱心な信奉者となる。姉崎正治「世界統一の予言(聖祖降誕会に於て)」『大崎学報』2(1905)、54頁。
25. T. S. Eliot, "What Is Minor Poetry," 1944, *On Poetry and Poets* (London: Faber and Faber, 1957), p. 42.
26. T. S. Eliot, "What France Means to You," *La France Libre*, 8:44 (15 June 1944), p. 94.
27. T. S. Eliot, "T. S. Eliot," *Irving Babbitt: The Man and Teacher*, ed. Frederick Manchester (NY: G. P. Putnam's Sons, 1941), p. 102.
28. V. S. Pritchett, "'Our Mr. Eliot' Grows Younger," *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958), p. 73.
29. T. S. Eliot, "American Literature and the American Language," 1953, *To Criticize the Critic and Other Writings* (London: Faber and Faber, 1965), p. 44.
30. William Turner Levy and Victor Scherle, *Affectionately, T. S. Eliot: The Story of a Friendship, 1947-1965* (Philadelphia: Lippincott, 1968), p. 121.
31. 「J・アルフレッド・ブルーロックの恋歌」と後述する「J・アルフレッド・ブルーロックの恋歌」からの引用は『T. S. エリオットの詩・劇全集』(*The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*, 1969)による。
32. T. S. Eliot, "Essays, Addresses, and Verses, 1939-1956, with some *Obiter Scripta*," English Text of Speech Delivered in French in Brussels, 4 December 1949, The John Hayward Bequest of T. S. Eliot's Library Manuscripts, King's College Library, Cambridge, p. 1.
33. George Plimpton, ed., "T. S. Eliot," *Writers at Work: The Paris Review Interviews*, 2nd Series (Harmondsworth: Penguin Books, 1979), p. 99.
34. T. S. Eliot, "Notes on Eastern Philosophy," p. 1.
35. Masaharu Anesaki, *History of Japanese Religion: With Special Reference to the Social and Moral Life of the Nation*, 1930 (Tokyo: Charles E. Tuttle Co, 1966), p. v.
36. Masaharu Anesaki, *History of Japanese Religion: With Special Reference to the Social and Moral Life of the Nation*, pp. 191-205.
37. 姉崎正治「鎌倉時代の仏教と現代思想(上)」『人文』1-11、1916年、6頁。



38. 日蓮『立正安国論』1260年（堀日亨編『日蓮大聖人御書全集』創価学会、1967年〔初出1952年〕、31頁。
39. 同上、26頁。
40. 日蓮『報恩抄』1276年（同上、302頁）。
41. 日蓮『撰時抄』1275年（同上、263頁）。
42. 日蓮『開目抄』（上）1272年（同上、195頁）。
43. 日蓮前掲『撰時抄』（同上、263—64頁）。
44. 姉崎正治「渡米中の所感」『法華』1—4、38—39頁。
45. 晩年の姉崎の記憶によれば、「帰一協会の如きも、万法帰一という事を主にして、諸々の宗教が異なった特色をもって、しかも共通の目的に向って進む事を重んじた運動であった。」姉崎・姉崎先生生誕百周年記念会前掲『新版 わが生涯』110頁。
46. 姉崎前掲「渡米中の所感」40—41頁。
47. 姉崎正治「日本は何故に外国に了解されざる乎」『ニコニコ』43、1914年、17—18頁。
48. 姉崎正治「世界の進軍と世界的文明」1905年（姉崎正治『国運と信仰』、弘道館、1906年、443頁）。
49. 姉崎正治「戦勝と国民的自覚と日本文明の将来」『太陽』11—7、1905年、49頁。
50. Grover Smith, ed., *Josiah Royce's Seminar, 1913-14: As Recorded in the Notebooks of Harry T. Costello*, New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1963, p. 194.
51. F. H. Bradley, *Appearance and Reality: A Metaphysical Essay*, 1893. Oxford: Clarendon P, 1966, p. 379.
52. Louis A. Cuddy, "Circles of Progress in T. S. Eliot's Poetry: *Ash-Wednesday* as a Model," *T. S. Eliot, A Voice Descanting: Century Essays*, ed. Shyamal Bagchee, London: Macmillan, 1990, p. 99n; Charles M. Bakewell, *Sources Book in Ancient Philosophy*, NY: Charles Scribner's Sons, 1907, p. 34.
53. Bertrand Russell, *The Autobiography of Bertrand Russell, 1914-1944*, vol. 2, 1968, London: George Allen and Unwin, 1978, p. 212.
54. 姉崎正治「十二時の打つ時」『人文』2—4、1917年、8頁。
55. 姉崎正治「世界の新局面に対する覚醒」『雄弁』8—13、1917年、6頁。
56. 姉崎正治「人本主義の実行」『中央公論』33—1、1918年、63頁。
57. 予言者としての日蓮については、姉崎の『予言者日蓮』『学生』7—5、1916年、716—25頁を参照。